

報告書

太平洋北西部のサケプロジェクトに参加して

7/30~8/5 古田 武年

「7/30 am9:30 ワシントン州 MountVernon の CottonTreeInn に集合」

集合時刻に遅れないようにとのことで、前日の 7/29pm3:30 に一人で成田を出発しました。そこで、とんだハプニング。予約していた航空券がダブルブッキング。次の便(翌日)にしていただけませんかと言われ、困りますと応えると待つことに。延々と待たされ出発ギリギリになってチケットを渡され機内へ入ると、自分の席に別人が座っていました。またまたダブルブッキング。それでも何とか席を確保してもらい、ようやく出発することができました。

8時間半かかってシアトルへ着いたのがなんと 7/29am8/20。空港からシャトルバスで、2時間かかって CottonTreeInn へ。そこからタクシーで宿泊予定の TulipInn へ着いたのが12時少し前。昼食をとってから6時ごろまで仮眠しました。そのホテルで、もう一人の日本人久保さんと夜の7時に待ち合わせの予定でしたが、着きません。バスの便は2時間に1本です。9時・11時になっても来ません。連絡の取りようが無く、一人で不安になっていたところ、12時過ぎにようやく久保さんが到着しました。アメリカ国内で乗り継ぎの時、厳重なチェックのため時間がかかり予約していた便に乗れず、大幅に遅れてしまったとのことでした。

翌朝、9:30集合場所の CottonTreeInn へ行きました。ワシントン大学の教授ラルフのもとに初めての顔合わせです。ボランティアはアメリカ東海岸から教員のミック・キャサリン・サラ、法律家のヘンリー、学生のジェイ、香港から銀行員のジョナサン、そして日本から久保さんと私の計8人。互いの挨拶もそこそこに、ホテルの一室を借りてパソコンを使ってプロジェクトの概要のレクチャーを受けました。

ラルフの車で調査地ダーリントンへ移動し、宿舎で、私達の今回の活動のさらに詳しいレクチャーを受けました。

サケが遡上し産卵するためにふさわしい環境とは、川底に砂礫があり、湧き水があること。そして、大きな岩や太い倒木が川床にくぼ地を作り、変化に富んだ溪相であること。そのために川の近くに大木の存在が欠かせないこと。そこで、川原の幅や水面の幅、水深、川の近くに生えているダグラスファー・ウェスタンレッドシーダー・ウェスタンヘムロック・パシフィックシルバーファーなどの大木の太さや高さや樹齢を調べ、GPS を使って位置・方角・土地の高さなども測量し、正確な地図作りをするということが話されました。

いろいろな器具の扱い方の指導を受け、足場が悪いことや、熊や蜂などに出合ったらどのように対処したらよいかなども話された後、近くの川に行き、実地訓練を受けました。

日程はだいたい7:00起床

7:30朝食 お弁当作り 準備

8:30出発

9:00頃 調査開始

4:00頃 調査終了

朝食や夕食はボランティアみんなで協力し合って作りながら、交流が深まりました。

7/31 8/1はスカジット川の上流を、4人ずつ2チームに分かれて川原と林間の測量をしました。

8/2は、スカジット川の支流カスケード川の fish hatchery(孵化場)を見学しました。カスケード川の本流はそのままにして置き、支流だけに堰を掛け、遡上するサケを捕獲していました。

60%ぐらいは本流を自然に遡上しているそうです。日本では本流に堰を掛け、100%捕獲しています。大きな違いが確かめられました。この川には、キングサーモン・ピンクサーモン・ギンザケ・ベニザケ・シロザケなどのサケが生息しているそうです。

午後からは、スカジット川の蛇行している様子が一望できる Sauk Mountain を登りました。いろいろな花や昆虫や鳥を見つけました。日本の動植物と大変よく似ていることに気づきました。アメリカでの名前、日本での名前をお互いに教えあったりして、ボランティア同士の交流が一層深まりました。

翌日からは、スカジット川の下流を測量するため、宿を Arn Farm に移動しました。

8/3 スカジット川の支流のクリーク(ブッシュ)を測量しました。

8/4 Beaver Lake に注ぐクリークの測量。ナショナルパークのため、特別許可を得て入りました。

8/5 いよいよ最後の日。7:00起床。朝食をとった後、荷物を片付け Arn の家を後にしました。ラルフの車で CottonTreeIn に戻り9:30ごろ別れを惜しみながら解散しました。私と久保さんはシアトルで一泊し、それぞれ別の飛行機で帰国の途につきました。

ところが、帰りはもっと大きなハプニングが待っていました。シアトルから成田まで、直行便です。半分くらい飛んだところで、乗客の中に急病人が発生しました。人命最優先ということで、最寄の空港に緊急着陸することになり、なんと、アラスカのアンカレッジ空港に向かうことになりました。結局、飛行機から降りて、一泊することになり、一日送れて帰国することになってしまいました。

何はともあれ、大変貴重な経験をさせていただき、ほんとうにありがとうございました。



川に横たわる太い大木

こうした倒木が水の流れに変化をもたらし、

サケにとって生息しやすい川床を作ることになります。



GPS を利用し基点を決め、川原の幅・水面の幅・川の深さ土地の高さなどを測量し、それをもとに正確な地図を作っていきます。



樹齢を調べるための道具と抜き取った芯



多少の技と力が必要です。



スカジット川本流と右手に注ぐ支流です。
この支流だけにサケの捕獲場があります。



中央の黒い固まりは、これから支流に入ろうとしているサケの群れです。



下流域のクリーク(小川)ブッシュの中でランチタイムをとっているところです。

① 体験から学んだこと

・地道な測量活動や、調査活動を積み重ねることにより、サケにとって好ましい環境のあり方を見つけ、その保全活動を続けている研究者たちがいることを知りました。また、こうした活動にはたくさんのボランティアが必要であることも、参加してみてよく分かりました。さらに、国際的にボランティアを募ることは、こうした大切な活動を、世界の人々に知ってもらい、みんな協力していくことになり、とても有意義だと思います。

国際的なボランティア同士が協力し合い、交流を深めるためには、英会話が良くできるほうが一層良いことも体験しました。

・人間のためだけに作り変えられた川、人間によって汚された川のサケが激減したことは日米ともに共通していることが分かりました。

・日米の相違点→サケの捕獲の仕方や孵化場の違いが分かりました。

日本は、川を河口付近で全面的に堰き止め、遡上してきたサケを全部捕獲します。アメリカは本流のサケは上流へ遡上できるようにし、わずかな小さな支流にだけ堰を設け捕獲します。日本の孵化場では、採卵した後の親魚を食用として安く販売しますが、アメリカでは、川に流して自然に帰すそうです。

・先住民とサケとの関係が共通していることも分かりました。

アメリカでは、スカジット人やソーク・スィアトル人が日本では、アイヌ人が自然を大切にしながら必要なだけサケを捕って暮らしていました。

② 体験したことを環境教育にどのように生かすか。

私は、子ども達と共にサケやヤマメを育てて多摩川に放流し環境問題を考えさせる活動を20年間続けています。

今年も12月から2月にかけて飼育観察活動をします。

子ども達の身近な川の水質や川の形態などの現状を調べさせ、放流したサケやヤマメが無事に帰ってこられる川にするにはどうしたらいいかを考えさせます。そのヒントとしてアメリカでの体験を伝えたいと思っています。